

# グスタフ・クリムト 《フリーデリケ・マリア・ベアの肖像》における中国の人物群像 — 図像の着想源と主題に関する考察 —

大阪大学  
尾崎登志子

クリムトの晩年の女性肖像画には、中国美術から着想を得たと思われるモチーフや人物像が数多く用いられている。1916年に制作された《フリーデリケ・マリア・ベアの肖像》には、中国の騎馬武者や兵士たちが繰り広げる戦闘場面が背景に描きこまれている。この人物群は空間恐怖的とも言える程モデルをびっしりと隙間なく取り囲んでおり、画面の大きな要素を占めている。

この特異な人物群像は、これまで多くの研究者の注目を集めてきた。しかし画家の東洋美術に関する収集品の多くが焼失して現存していないこともあり、このイメージの着想源となった美術工芸品はおろか、図像の主題さえ未だ明らかになっていない。そこで本発表では、この一世紀近く解明されなかった背景の人物群の直接的な図像源を提示する。さらに、用いられた図像の主題を読み解き、その背景となった当時の文化的動向についても言及する。

先行研究ではモデル自身の証言をもとに、画家の所有していた中国の壺が画家に示唆を与えたと記されている。発表者はその記述と図の色使いから、清代に生産された五彩の景德鎮磁器を着想源として想定した。海外の美術館の所蔵品やオークションを調査した結果、肖像画背景の戦闘場面と酷似する絵文様が施された景德鎮磁器を複数確認することが出来た。磁器の絵文様と肖像画背景の人物群像を比較してみると、モデルの左右に描かれた二人の騎馬像や画面全体に配された兵士たち、彼らが身につけている衣装や装飾品、その他の小道具に至るまで個々のイメージが合致している。そのため、ヨーロッパに輸出された同種の景德鎮磁器を画家が参照して肖像画の背景を描きこんだ可能性が高い。

次に、着想源となった磁器の図像を解説する。近年のオークションで出品された広東磁器の図柄を参照し、人物や個々のモチーフの特徴を比較した結果、複数の景德鎮磁器に描かれた図像が明代の長編小説『三国志演義』の一場面である「長坂の戦い」を表したものであるということが判明した。これを踏まえて肖像画背景の人物群に立ち戻ってみると、背景左側の人物が「趙雲」、右側の人物が「張飛」だと判断することができる。つまり、背景に用いられたイメージは『三国志演義』という中国を代表する小説の一場面なのである。

20世紀初頭はドイツ語圏において中国文化に対する関心が急激に高まっていた時期であった。晩年において中国文化に関する造詣を深めていたクリムトが、文学作品や輸入された工芸品などを通して「三国志」についての知識を得た可能性は十分考えられる。

以上の新知見、伝えられているクリムト自身の発言、モデルであるフリーデリケの人柄などをふまえた上で、本作品について新たな解釈を提示したい。